

「もとはこちら」のお話し

No. 57 今月のテーマ 百の説法よりも 一粒の涙



善人も悪人も
あなたも私も
みんな神の子
一列兄弟

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

ひと頃、反省猿というのがいて、反省しているそのしぐさの可愛らしさが、とても評判になった事がありました。

しかし大部分の人は、他人(他猿?)が反省している姿を見る事は好きな様ですが、自分自身が反省するのは、あまり好きではないようです。

その証拠に、たとえ自分では、「あれは、まずかった」、「失敗した」と思っていたとしても、他人から「反省しなさい」等と言われたりすると、反省どころか殆どの人が「何、反省? 何を偉そうに。私は反省をしなければならぬ程、悪い事はしていない!」と言って怒るのがおちです。そういう私も、もしも誰かから「反省しなさい」等と強くつめ寄られたりすれば、やはりあんまり良い気持ちはしないだろうと思います。

しかし平井先生は、「反省すること」ほど、自分の向上にとって大切なものはないと、いつも言われておりました。

そして勉強会では、「反省、お詫び、懺悔、訂正」ということばを一連の言葉として、耳にたこが出来るほど、その事の大切さを強調されました。

反省する人、しない人

さて、今更驚くべき事でもないかも知れませんが、世の中の殆どの人は、「自分の考えている事や、自分がしている事は、正しい事だ」と考えながら生きています。

そしてまた殆どの人が、何か不幸な事や、気に入らない事が起きた時には、瞬間的に、「自分は正しかったが、相手が悪かった」、「自分以外の何かが間違っている」と考えるような癖が付いています。

そういう中であって、「もしかしたら、自分のやり方、考え方は、間違っていたかもしれない」と考え、素直に反省し、訂正できる人は、とても幸せな人です。自分の間違いに気付けば、そこからまた、正しい方向に向きを変える事が出来るからです。

北原ゆり筆

しかし、失敗は、やはり人のせいにしておく方が、気が楽だと言つて、自分からは出来るだけ反省しようとしないうや、またどんな場合であつても、「自分のする事は、絶対に間違いない」として一歩も引かない人など、反省をしない人というのも結構います。

こういう人の事を平井先生は、「大人おさな人」と呼びました。

この様な物事の道理を分かつとしない大人おさな人や、頑固で偏屈な人は、余程の事が無い限り自発的に反省するという様なことは、ありません。

そしてまた余程の事が無い限り、周囲の人も、そういう人に対しては見てみぬ振りをし、注意してあげるといふ事もありません。相手に嫌がられ、煙たがられてまでも、注意をしてあげようというような、奇特な人は少ないのです。

それに余程の覚悟をもつて注意をしたところで、素直に聞き入れられる事は少なく、反つて気まずい関係になつてしまふ事が多いのです。それで、心の中では注意をしてあげたいと思ひながらも、まあいずれまたそのうちに、というような事で、その場をやり過ごしてしまう事が多いのが現実です。

人に注意をするという事

ですから、人から注意をして頂けるといふ事は、本当はともありがたい事なのですが、ところが悲しい事に、先程も言つたように、誰かから注意を受け、反省を求められたりすると、私達は瞬間的にそれに反撥し、なかなか素直に相手のいふ事を受け入れる事ができないのです。

それで平井先生は、自分が誰かに注意をしたり、反撥法、即ち相手に試練を与えなければならぬ立場になつたような時



には、余程、深く注意せよと言われました。

そして、もしも自分自身が、誰かから注意を受けたり、反撥法を使われたような時に、それに対して反撥したり不服に思つたりするような事では、人に対して注意する資格はないと言われました。

自分自身がそれらの事を喜んで素直に受け入れられる様になつた時に、はじめて、自分も他人に対して注意をしたり、反撥法などを使つても良いのだと言われたのです。

例えば、目上の者から「ここを掃除せよ」と言われたとします。

それで、自分ではきれいに掃除ができたと思つてゐる所を、命令したその当の上司によつて意図的に汚され、「汚いからもつと丁寧に掃除をせよ」と言われたとします。その様な時、大體の人は理不尽な事を言う相手に対し、激しく反撥し、相手を責めるか、ふてくされるか、或いはたとえ掃除をやり直すにしても、不満をいっぱいに持つた心の状態で掃除をしないおす筈です。

しかしそうではなく、「もつときれいに掃除せよ」と言われた時に、素直にその場所の汚れを認め、喜んでもう一度掃除が出来るとな自分になつた時に、はじめて自分も誰かに対し、「もつときれいに掃除をせよ」と言ふ資格ができると言われたのです。

一見いじめとも受け取れるような仕打ちに対してさえ、その様な事を言われる自分に原因を求め、そして明るく正しく反省し、自分自身の過去に対してお詫びをし、そして懺悔や訂正をしながら、もう一度その場所を、前よりももつときれいになるように、心を込めて掃除をせよと言われたのです。不服の心を持つて相手を変えようとするのではなく、自分自身を変えよといふ事です。

至る人ほど、謙虚である

さて、自分にとって辛い事、受け入れがたい事を仕掛けてきたその相手が、大自然である場合は、私達の心は当然、悲しみや苦しみでいっぱいにはなりますが、それでも自分を苦しめた大自然に対し、憎しみや憎悪の念を抱くという事は、あまりないはず。

しかし相手が人間であつた場合には、私達はよほど注意をしないと、相手を憎んだり恨んだりする事になってきます。いじめではなく、たとえ相手がこちらの為にと想着て親切で言ったり、したりしてくれた場合であっても、自分が、自分自身の未熟さに気付かず、思ひ上がっているような場合には、その意が解せず、相手に反撥する事になります。このような憎悪の心は、自分に対してもまた相手に対しても、決して良い結果を招く事はありません。

「貧しきものは幸いなり」という言葉があります。

貧しいという事は、通常は良くない意味に使われる事が多いのですが、ここでいう「貧しき者」とは、「己の至らなさ、未熟さを知っている者」という意味に解釈する事ができます。

自分が至らないという事を知っている人は、いついかなる場合であっても、常に謙虚です。そしてこの、自分の至らなさ、未熟さを知っているという事は、同時に、「至りきつた、完全完璧なものの存在」という事を知っているという事につながります。なぜなら完全完璧という事が分からなければ、自分が至らないという事も、分かりようがないからです。

しかし面白い事に、この「人間は完全完璧でない」と知っている人にも、二通りあります。

頭の中だけでその事を知っている人は、大体は自分の失敗を弁解する時に、この言葉を使います。「私も人間なのだから、

たまには間違いを犯すこともあるさ」と、いうようにです。

一方、完全完璧な人間などはどこにもいないという事を、心の底から知っている人は、他者に対して寛容であり、不完全で至らないのはお互い様、という事を知っています。ですから決して相手の間違いや未熟さを責めるような事は致しません。

そしてどう考えても相手が間違っていると思われる時には、自分にも同じ未熟さや至らなさがある事を十分にわきまえた上で、決して上座に構えることなく、常に温かい心で相手の幸せを思いながら、そつと注意をさせて頂く様にするはず。

己の本質を知れば、私達は誰でも謙虚になるはず。そして己が謙虚になれば、「反省せよ」などと横柄な態度で相手に反省を迫るような事はしないはず。

ただし、謙虚であるという事は、単に目上の人に対して謙虚であるという事ではなく、誰に対しても、そして何に対しても、常に謙虚であるということです。

目上の人に対してだけ謙虚さを装うのは、それは謙虚なのではなく、卑屈というものです。謙虚と卑屈は全く違うものです。

謙虚であるという事は、人間である相手に対して、自分の至らなさや未熟さを感じるといふ事ではありません。人間同士としての関係ではなく、完全無欠な神仏に対して謙虚であるといふ事であり、そしてその完全無欠で神聖な神仏ともいふべき本質を持つ、全ての人、すべてのものに対して謙虚であるという事です。

高僧の流した涙

人の道を踏み外して犯罪者となってしまうたような人と対する場合であっても、本当の謙虚さを知る人は、決して相手の事を、見下したり、批判非難の目でみるような事はしない筈で



す。相手の不徳な行為を見た場合も、その行為行動の良し悪しに捉われる事なく、常に、神聖なものを内面に持つ相手の本質を受け入れ、仏の化身ともいふべき相手を敬うということです。

ある高僧が、刑務所を訪れた時の話です。

目の前に居並ぶ囚人たちを目の当たりにしたこの高僧は、思わず「ああ、仏様たちがこんな姿で、こんな所に並んでいなさる。本当にお気の毒に」と、言つてはらはらと涙を流されたそうです。すると囚人たちの間で噁り泣きが始まり、やがて全員が泣き始めたそうです。

それまで事あるごとに非難され、批判され、反省を迫られ続けてきた囚人たちにとって、自分の事を思つて、心から泣いてくれる人がいるという事など、考えられない、大きな衝撃だった筈です。衝撃は感動に変わり、そして自分もそんな大きな罪を犯してしまった自分というものを悲しんで、彼らは心の底から泣いたのです。

心の底から泣く事によつて、それまでのすさんだ心が洗われ、その時を境に、囚人たちは今までとは違う、穏やかな面を出すようになつていったという事です。

高僧は、説教したり、諭す様な事は、ひと言も言いませんでした。ただ、一人ひとりの内に宿る神聖な神様仏様と対座しながら、その仏様たちがこんな所でこんな状態でいらつしやるといふ、その事の不幸を思つて、ただ、泣いたのです。

そこには囚人達を立ち直らせようとか、まともな人間になる様に矯正せねば、という様な思いはなく、ただただ相手の心の中にある怒りや苦しみ、そして悲しみを思い、相手と共に涙を流しただけです。

そこには、罪を犯したわが子をみて、理屈を超えてただ泣きに泣くという、そういう親の涙に重なるものがあるように思います。

ところで、見るも因縁、聞くも因縁と言われますが、自分の中に何も原因となるものがなければ、こういう囚人達と自分が接する事ありません。実は、目の前に囚人がいるという事は、囚人を通して、過去の自分自身の姿を見せられているという事です。

ですから私達は、相手の中に過去の自分の姿を觀て、自分が正しく反省し、お詫びをし、懺悔をして反省し、訂正していく事を求められているという事です。相手を諭したり、説教したりするのは、傲慢というものです。反省は人に求めるものではなく、自分が自分の為に自分でするものです。

過去の間違いに気付かせ、人間としての正しい生き方を教えて下さっているのが、この場合でいえば、こうして囚人の姿をして目の前に並んでおられる、神様仏様たちです。涙ながらにお詫びをしなければならぬのは、未熟で至らない自分です。相手を批判せず、またいたずらに哀れんだりしない、そういう高僧の、仏に通じる純粋な涙が、すさんで荒れくれだった囚人達の魂を救い、同時に、高僧ご自身が、その囚人達によつて、より深く救われて行つたのです。

人の魂を救うのは、百の説法よりも、心から流す清らかな一粒の涙です。

さてあなたは、自分のためではなく、見も知らぬ 人のために、心から涙する事が、できるでしょうか。

〔ご案内〕

9 月の勉強会は、9 月 3 日(土)午後七時からです。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com

TEL 073・461・6300